和紙の触覚研究

–「けびたり」が人に与える心的効用について–

Tactile Studies on Japanese Handmade Paper

-The Psychological Benefit of “Kebitari” on human-

■　春木　孝太　Kota HARUKI

愛知県立芸術大学大学院　柴崎幸次研究室

Aichi University of the Arts

■　キーワード　和紙　触覚

はじめに

本研究では、和紙から引き出された繊維に癒しや安らぎ、ストレス軽減などの心的効用があることを明らかにする。和紙の繊維を最大限に感じられるかたちを制作し、コンペティション及び展覧会などで反応の聞き取り調査を行う。

和紙には、「水切り」と呼ばれる独特の裁断方法がある。筆を使って水で線を引き、両側から引っ張ると中から長い繊維が現れる。それはまるで猫の手触りのようだ。この体験から、「アニマルセラピー」のように、和紙の繊維に触れることで人の心に癒しを与えることができるのではないかという、本研究の着想に至った。

日常から姿を消しつつある和紙が、日々液晶画面と向き合い、ストレスを抱える人々の心を整えるアイテムとして現代の暮らしの中に自然と馴染むと考えられる。また、素材としての和紙の可能性を示すことで、和紙の新たな潮流を生み出すことが期待でき、生活・芸術文化の更新に繋がるだろう。

本研究概要として、第 1 章では、和紙の特性、第 2 章では、先行事例について触れる。第 3 章では、研究作品について説明する。第 4～第 7 章では、反応・フィードバックとその考察を行い、まとめで本研究の結論を述べる。

1.和紙の素材特性と繊維としての利用

和紙は、木の樹皮から取れる靭皮繊維を原料とし、「流し漉き」と呼ばれる紙漉き技術により柔軟で強靭な性質を持つ。そのことから日本では、紙から様々な用途が生み出され、素材として触れる文化が発達し、欧米のように文字の記録媒体にとどまらない物質的なコミュニケーションが交わされてきた。

修復分野において和紙は、細かく裂いた繊維状態で利用され、馴染みの良さや強度、長期安定性などその機能性が高く評価されている。また、「飾り馬」と呼ばれる節句人形は、和紙から引き出された繊維によって馬の毛並みが再現されており、表現手段としてもその特性が利用されている。

第2章では、研究作品を制作する上で、踏まえておきたい先行事例の技法を調査し、制作に向けての考察を行う。

2. 先行事例の技法について

2.1. 飾り馬

飾り馬とは、端午の節句に飾る馬の人形で、奉書紙を張り、馬の毛並みを再現したものを特に「奉書馬」と呼ぶ。その成立は、江戸時代頃からといわれ、実物の馬の毛並みの印象を繊維で表現するため越前奉書紙を素材としている（図 1）。

図 1 飾り馬（奉書手漉き和紙使用）

2.2. 五箇山紙塑人形

五箇山紙塑人形とは、富山県南砺市五箇山地区にある相倉合掌造り集落で作られる人形で、断裁後に出た紙の端材を糊と混ぜ合わせ粘土状にし、型にはめて成形を行う。乾燥後、和紙を上張りし、仕上げに絵付けを行う（図 2）。

図 2　五箇山紙塑人(着色前)

2.3 考察

「飾り馬」は、繊維の緻密な張り重ねとブラッシングにより馬のリアルな毛並みを感じられた。体を覆う馬具などによって繊維そのものの効果は薄れ、要素として使われているという印象を受けたため本研究との目的の違いが確認できた。

紙塑人形は、手にしたとき、ほどよい重みがあり、張子人形よりも安心感を覚えた。作品は手に持つことも想定しており、構造部としてふさわしい製法であると考える。

3. 研究作品『けびたり』

けびたりとは、「和紙の繊維を主体的に扱い、その触感及び視触覚的効果を最大限に引き出すことで人を惹きつけ、人の心に癒しや安らぎを与えるかたち」である。

その名前の由来は、“鑑賞者が思わず触れてみたくなり、触れるとずっと撫でていたくなる”という様子を、“繊維の気配に浸っている”と感じたことから「けびたり」と名付けた。また、古来の日本より“け”には、「日常」という意味があり、けびたりが現代の日常に自然と馴染んでほしいとの願いを込めた。

手中での収まりの良さ、繊維の触感、視触覚的効果が最大限に引き出される形状と大きさを判断基準とし、形状（卵型）・大きさ（H＝65,D＝70,W＝65～H＝75,D＝80,W＝75mm）・繊維の間隔（紙の部分が繊維で完全に隠れる状態）を定めた。

また、紙塑の硬質さは繊維の触感を引き立てる効果があった。

制作方法は、原料（廃棄された機械抄製の紙）に糊を加えず、手で水気を絞るように成形する。天日干し後、薄手の和紙を一層張り、崩壊を防ぐ。完成した紙塑の表面に帯状に水切りした和紙をずらしながら段々に張り重ねる（図3）。

図３『けびたり』

4.「PAPER CONNECT TOYOTA」

4.1. 概要

「PAPER CONNECT TOYOTA」は、2023 年 9 月 2 日(土)～2023 年 9 月 3 日（日）まで豊田産業文化センター（愛知県豊田市小坂本町 1-27）内の喜楽亭で行われたグループ展である。

「紙による表現の豊かさや可能性を展開する」をコンセプトに行われた本展覧会に出品作家として参加した（図 4）。

喜楽亭は明治時代後期から続いた料理旅館で、大正期の代表的町屋建築として知られる。現在は、市民の文化行事などに利用されている。

図４　展覧会フライヤー

4.2. 展示方法

床の間の畳に３つのけびたりを展示した。建築にそっと溶け込み、より気配を感じる翳りを意識したライティングを心がけた。また、素材には、愛知県の和紙（愛知県豊田市を拠点に活動を行う紙漉き職人の佐藤友泰の楮紙、豊田市和紙のふるさとの森下紙、三洲足助屋敷の森下紙）を使用した（図 5）。

図５　喜楽亭　展示風景

5.漉き手、佐藤友泰に触れてもらう

原料の植物の状態や舟に浮かぶ状態、乾いた紙料の状態など、それぞれの過程におけるさまざまな状態の繊維に触れる漉き手に自身が漉いた紙から引き出した繊維「けびたり」を体験してもらい、その印象や触感についての反応を得る。

愛知県豊田市に工房を構える佐藤友泰は、東大寺正倉院に収蔵される紙にならい、手打ち叩解など伝統的な製法を継承し、「1000年先に残る紙漉き」を目指している（図 6）。

佐藤氏が漉いた楮紙を素材とした「けびたり」に触れてもらい、以下のような反応が得られた。

「独特の触感で面白い。これまで色んな人に僕の漉いた紙を使ってもらってきた。その中でも、この作品には、僕が漉いた楮紙の繊維を大切に扱ってくれていると感じられる」

和紙は細かく裂かれ、その原型をとどめていないが、張られた繊維の生き生きとした表情から、「大切に扱ってくれている」という感想になったと考えられる。素材を作る立場にある佐藤氏からのこのような反応が得られたことは、素材の特性を最大限に引き出すことができているという一つの基準になるだろう。

図６　見本帳を持つ佐藤友泰氏

6.コンペティションでの成果

第31回特種東海製紙紙わざ大賞に出品し、入選の評価を得た。現在作品は、入賞作品展にて展示され、その後巡回展も予定されている(図 8)。

図 8　入選作品 『けびたり』

展覧会名/会期・会場

「第 31 回特種東海製紙紙わざ大賞　入賞作品展」
2023 年　12月 7 日(木)～2022年 2 月 29 日(木)
特種東海製紙 Pam 静岡県駿東郡長泉町本宿 437

7. 展覧会 「けびたり　和紙はくすぐる。」

7.1. 概要

「紙の温度」は、手漉き和紙と世界の紙を多様に取り扱う紙の専門店である。「紙の温度」が掲げる「人の手が育んだ知恵と技術の継承」は、本研究の意図と重なる。また、紙に強い関心を寄せる利用者の反応・フィードバックが期待できることから、「紙の温度」を本展覧会場として選んだ(図 9)。

図 9　展覧会 DM

展覧会名/会期・会場

「けびたり　和紙はくすぐる。」
2023 年　11 月 16 日(木)～2023 年 12 月 3 日(日)
紙の温度 名古屋市熱田区神宮 2 丁目 1-26

展示方法

感じ方の異なる 4 つのブースを設け、展示と販売からけびたりへの反応の聞き取りを行った。昨年の展覧会では、繊維の効果を最大化する紙塑の形状を探るために様々な形状のけびたりを展示した。本展覧会では、それぞれの和紙の繊維の効果を引き立てるために形状を卵型に統一し、その違いを大きさのみとした。

ブース 1　産地に触れる

東北地方から九州地方まで各地域から様々な歴史、用途を持つ和紙 13 種類を素材としたけびたりを日本列島の印刷されたパネル上に展示した。また、キャプションと照らし合わせることで産地ごとに備わるストーリーに触れ、理解を深められる会場構成を行なった。

使用銘柄:月山和紙(山形県)、西ノ内和紙(茨城県)、細川紙(埼玉県)、ふわた和紙(新潟県)、悠久紙(富山県)、森下紙(愛知県)、薄美濃紙(岐阜県)、宇陀紙(奈良県)、高野紙(和歌山県)、石州和紙(島根県)、十川泉貨紙(高知県)、八女紙(福岡県)、芭蕉紙(沖縄県)(図10)

図10　ブース 1 展示風景

ブース 2　贅沢に触れる

引き出された繊維が特に上質と認められる 6 種類銘柄を素材としたけびたりを展示した。繊維の上質さを最大限味わうため手全体から繊維を感じることのできる、触れごたえのあるサイズで制作した。

使用銘柄:純楮紙(佐賀県)、加賀奉書紙(石川県)、杉原紙(兵庫県)、越前奉書紙(福井県)、本美濃紙(岐阜県)、黒谷和紙(京都府)(図11)

図11　ブース 2 展示風景

ブース 3　漉き手に触れる

植物本来の色味や草木染め、顔料の漉き込みなど様々な色彩を持つけびたりで構成し、色味のニュアンスや触感の違いから漉き手の知恵やこだわり、独自性に触れてもらう。

使用銘柄:三宅賢三の紙(檜紙、竹楮紙、たぶ三椏紙、オニシバリ紙)、明松誠二の紙(イタリアの青の紙)、加納登美夫妻の紙(赤土入り紙)、藍紙(イタリアの青の紙との比較として、同じブースに展示した。産地は阿波、美濃、石州)(図 12)

図 12　ブース 3 展示風景

ブース 4

店舗側の提案により、追加されたブース。手に取りやすい価格帯を実現するために本研究の規格よりも小さい、「プチけびたり」H＝4,D＝4.5,W＝4(cm)～H＝5,D＝5.5,W＝5(cm)というかたちで展示販売を行なった(図 13)。

図 13　ブース 4 展示風景

7.2. 反応・フィードバック

約 3 週間の展示期間を通して、会場で直接聞き取りを行い、鑑賞者より以下の反応が得られた。

「自分が亡くなったとき、棺に一緒に入れて焼いて欲しい」と口にする購入者や遺族の方へのお慰めの花の代わりに「けびたり」を選ぶ購入者もいた。また、「和紙が自然の中から生まれたものであることを再認識させてくれる」や「和紙をただ見て触れるよりも違いを感じやすく、その違いから生まれる魅力を拾いやすい」といった、和紙を知る新たな接触方法としての有用性を示すような反応も得ることができた。

7.3.考察

様々な言葉や反応から比較的女性の鑑賞者が繊維の微妙な違いを察知し、深く感情移入していると思われる。触感の良さだけを理由に購入する人は少なく、「紙が持つストーリー性」や「出身地に近い産地の紙」など、自身との何らかの接点や意味が最終的な判断材料になっていることが分かった。

「昔使っていた毛布を思い出した」というような個人の深い記憶を呼び起こすような反応が得られた。また、展覧会後に購入者から、「今、けびたりを寝室に置いています」というメッセージをもらった。パーソナルな空間に置かれていることから、「けびたり」が癒しや安らぎとして機能し、利用者と和紙との心身的な距離の近さが伺える(図 15)。

7.4.作品の取り扱い

展示会後、利用者の反応から、「プチけびたり」を商品として取り扱いされることとなった。形状は卵型、サイズは 1 種類とした。使用銘柄は、愛知県にゆかりのある森下紙と赤土入り紙の 2 種類のけびたりを各 3 つ、計 6 つを新年の開店に合わせて納品した(図14)。

図 14　売り場風景

まとめ

展覧会等を通して、さまざまな鑑賞者の反応から想定していた癒しや安らぎの効果が認められた。当時飼っていたペットや昔使っていた毛布の手触りなど、記憶を呼び起こさせる作用や懐かしさを感じるという反応があり、「けびたり」が、鑑賞者に触覚的な刺激を与えていることが確認できた。

これからの展開として、「けびたり」と動物繊維や化学繊維との触感や効用の違いを実証することでその価値をより明確なものにしたいと考えている。また、本研究で実施した漉き手に「けびたり」を触れてもらうフィールドワークを企画化し、漉き手視点の反応を集めることで別の角度からその意義をさらに深めていきたいと考えている。今後の発表の機会として、2024 年に台湾と東京で「けびたり」の展示を予定している。台湾での展覧会では、文化の異なる人々にどのような伝わり方をするかなどその反応や感じ方の違いに期待が寄せられる。

他参考文献

・久米康生、『和紙　多彩な用途と美』、玉川大学出版部、1998
・小林良生、『和紙博物誌　暮らしのなかの紙文化』、株式会社　淡交社、1995
・宍倉佐敏、『和紙の歴史　製法と原材料の変遷』、財団法人印刷朝陽会、2006
・寿岳文章、『和紙落葉抄』、湯川書房、1976
・テクタイル、『触楽入門』、朝日出版社、2016
・傳田光洋、『第三の脳』、朝日出版社、2007
・『HAPTIC　五感の覚醒』、株式会社竹尾　編　原研哉＋日本デザインセンター原デザイン研究所　企画/構成、2004
・原研哉、『白百』、中央公論新社、2018
・向井一太郎・向井周太郎、『ふすま　文化のランドスケープ』、中央公論新社、2007
・森島紘史、『知の資源　和紙のデザイン』、鹿島出版会、2003
・『和紙のある暮らし』、平凡社、太陽編集部、コロナ・ブックス 編、　2000
・『和紙と洋紙　その相違点と類似性』、公益財団法人　紙博物館、2013
・『WASHI 紙のみぞ知る用と美』、
石黒知子　編、浅野昌平　監修、LIXIL ギャラリー企画委員会　企画、LIXIL 出版、2016